平成２９年度第１回　岐阜県人権懇話会　会議要旨

日時：平成２９年５月２２日（月）１３：３０～１５：３０
会場：議会棟２階　第二面会室

議題：岐阜県人権施策推進指針（第３次改定）（案）について

（委員）
　ＨＩＶに感染する人たちのことについて、報道でほとんど取り上げられないが、減ってはいない。梅毒も増えている。学校教育の中で教えていくことが大事で、保健体育の授業などで性感染症の中の一つとして症状については教えられている。しかし、なぜ感染するかについては教えられていないので無防備なまま大人になっている。

（委員）
　福祉分野全体の中で地域包括ケアシステムへの組織作り、サポートについて、地域住民一人一人が問題意識を持てるような環境づくりを、進めていただきたい。そのことでお互いの人を支え合う、それが引いては人権の守り合いにつながっていく。

（委員）
　同和問題は、表へ出た事例は知らないが、潜在的な意識として、差別というよりは怖いという意識が、高齢者に残っている。
　学校におけるいじめについては、先生方が自分の学校にもあるという意識で見ないと無くならない。先生がそれを発見しようとする努力が必要である。

（委員）
　いじめというのはどこにでもあるもの。隠さず、問題解決意識を持って、解決していただきたい。現場では、すぐに何でも相談し、保護者、地域、学校の三者で解決するようにしている。
　生徒数が多いと、先生の目が届く限界を超える。それをカバーするため学校の中を巡回する活動を行っている。

（委員）
　いじめに関しては、子どもは家庭でシグナルを発している。親も子供のシグナルに気づいてほしい。親が気づかずにいて学校の先生になぜ気づかなかったのかと言っても無理な点もある。
　障がい者も単なる支援の受け手のみでなく社会の構成員として役割を果たしている。
　「安心・安全なまちづくり」と言われるが、弱者でないとわからない。当事者が不安や不便を感じた時に、どうしていくか社会に発信していかなければ変わっていかない。

（委員）
　社会に自分自身も受け入れられ、役割があるということを感じられた時に、自分が自分らしく生きていけるということを感じて、郷土愛も生まれて、外国人の定住にも繋がっていく。
　いじめをどう乗り越えていくか、力をつけさせるのが支援者の役割である。
　自信につがなる何か、その子の良いところを見てもらえるようなという視点で接している。

（委員）
　高齢化社会になってきて、高齢者を差し置いて、街づくりはできない。

（委員）
　教育現場でＩＴを活用した先生を支援するソフトウェアが出てきている。
　アレルギーに関して、食材とアレルギーのデータベースをマッチングさせて、アレルギー食材が使われる給食時に保護者の携帯電話に自動でメールが行くシステムをつくった。先生が子どもに接する時間に充てる時間を増やせるようなシステム開発を進めている。
　インターネットによる人権侵害は、簡単に消せないという問題がある。
　インターネットで特定のサイトを見ている人を脅すことも技術的には可能になっている。今後インターネットによる人権侵害は更に大きくなる可能性がある。

（委員）
　先生は大変な上に、何かあるとすべて学校の問題にされてくる。
　教育機器を使いこなした授業の準備が大変になっている。教育機器を使った視覚に訴える教材を作っているが、今までの教育と比べどちらが子どもたちに残るかは言いきれない。
　指針の文章が全体に一文が長すぎる。１行か２行で表現がされていると、読みやすい。

（委員）
　人それぞれに考え方・とらえ方に違いがある。特定の情報発信によって傷つく人がいると、気づける人、気づかない人がいる。教育で指導していくことも大事であるが、複数の目を通して、一端立ち止まって、いろいろな視点から考えて、他人を傷つけないかを考えながら、情報発信していくことが課題である。

（委員）
　フェイクニュース、日本の報道の自由度が世界７４番目であるとかメディア関係ではいろいろな問題がある。
　県性暴力被害者支援センターについては女性の人権問題の中でも触れた方がいいと思う。
　男女平等や理解教育はかなり進んできているので、イクメン教育、キャリア教育とか、家庭における意識啓発が重要である。
　メディアを読み解く力が人権に関わってくるのでメディアリテラシーが学校教育の中で必要になってきている。

男女共同参画を進めて行くには女性や関係者のみでなく、地域を含めた多くの人に呼びかけて行っていくことが必要である。
先生は、英語教育、土曜学習、発達障害、外国人の子などの個別指導が必要な子、シングルマザーの問題などありとあらゆる縮図が、学校の中に入ってきて大変だが、学校を中心とした地域を巻きこんだ教育が必要である。
社会教育、生涯学習というとそれに関わっている人中心になってしまうので、地域と一体となった生涯学習、社会教育という進め方が必要である。

（委員）
紋切り型の男女役割分担が、まだ残っている。それは違うと言うことを、言い続けないと男性は変わっていかない。

（委員）
人権課題に女性、子ども等の分類があるが、すべてが関わりを持つネットワークが大事である。
学校教育、社会教育、家庭教育それぞれ重さは一緒で、互いに絡み合わないとうまくいかない。
県民意識調査での新しい質問は、社会で問題になっている課題であるので、高いパーセンテージを示しているものは、文章の中にも書き、アピールした方が良い。
災害時の人権に関して、障害者も女性と同様に運営・訓練などに参画し、避難所の設営や運営について、当事者が意見を出していく必要がある。

（委員）
障がい者に関して措置という受け身の時代が長かったが、これからは自らどうしていくかを発信していかないと変わっていかない。

（委員）
地域からも障がい者等に呼びかけて地域で話し合う機会を増やしていくことにより障がい者等自身も発信しやすくなる。

（委員）
障がい者、子ども、女性も高齢者も、ここが不便だと、ここが良くないって言う話をどんどん出していかないと、社会は良くなっていかない。
地毛証明書の報道を見たが、髪の毛の色で判断するのでなく子どもの自立、自主性を尊んだ方が良い。

（委員）
外国人の子どもは「ルールだから守れ」と言っても納得しない。何故ダメかって言うところを理解させないといけない。

（委員）
　教員が部活などで長時間労働が続いていては、先生も理想的な教育ができない。また、子どもにとって本当の意味でのいい教育はできない。学校の先生の長時間労働の問題を、教育委員会で調査する必要がある。

（会長）
　人間としての自主、自立を子どもの成長のなかでどう尊重するかは大事である。「決まっているからやる」でなく、福沢諭吉が言っているが、議論する「多事争論」することが子どもの精神を育む。

（会長）
　同和問題・部落差別のことから勉強して、障がい者、ハンセン病、水俣の勉強と私自身が広がっていくことができた。
　肌の色、母語・母国語、障がいなど人間存在の根源にかかわる自由に選べない、変更できない事柄で人を貶めたり、低く見たり、蔑んだりすることは人間として愚かだ、という人間観を学ぶことができて、よかった。
　経験から「響き合い、重なり合う感性の広がりと深まり」ということを言い続けてきた。「同和問題をはじめとして」という言い方が長年続いたので同和問題が一番重い、一番重要だと思い込んだ人がいるが、生まれ・生い立ちに係る偏見・差別の一つである。

（委員）
　幼稚園、小学校、中学校は、子どもの人格を形成するのに、一番大事な時期に親よりも長い時間を共にするため責任が大きい。
　いじめの問題が多いが、ほとんどの先生は、数多くのいじめを見抜いて、未然に防いでいるし、真剣に取り組んでいる。

（会長）
　横浜市教育委員会での「１５０万円をプレゼントしたが、いじめだと言えない」ということはお粗末だ。学校において、何か肝心要の所が揺らいでいるのではないかと、国民は見ている。
　多忙になってくるとどこかで手抜きが生じる。教育委員会からくる調査、報告書の作成に時間がとられ一番肝心の子どもと向き合うところで手抜きがあると、子どもの成長にとって取り返しがつかないことになる。

（委員）
　その他の課題として高齢者などで生活苦を理由とする自殺の問題もある。